シャーリプトラの挙げるリスト

——女が就いた先例のない五つの地位——

小　林　信　彦*

A

海底にナーガ（nāga）の国があり，国王のサーガラ（sāgara）には8歳の娘がいた。ある時，この娘は『サッダルマ・プンダリーカ』(saddharma-puṇḍarīka/法華經）という経典を教わり，直ちに究極の真理に到達した。シャーキャ・ブッダ（śākya-buddha/釋迦佛）の弟子の中で最も賢いシャーリプトラ（śāriputra/舎利弗）は，このことを聞いて大いに驚く。女が究極の真理を会得したなどという話は聞いたこともない。女の身体をとっている限り，究極の真理に到達してブッダになるようなことが起こるはずはないのである。そこでシャーリプトラは，真理を会得した女が今までいなかった事実を指摘する。

> pañca sthānāni stry adyāpi na prāpnoti | katamāni pañca | prathamaṇ brahmasthānaṃ dvitīyaṃ śakrasthānaṃ tṛtīyaṃ mahārājasthānaṃ caturthaṃ cakravartisthānaṃ pañcamam avaivartikabodhisattvasthānam | (*Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, ed. Kern & Nanjio, 264)。
>
> 〔シャーリプトラは言った。〕「女は今も五つの地位に付くことがない。

＊本学文学部

キーワード：サッダルマプンダリーカ，シャーリプトラ，サーガラの娘，女が就けない五つの地位，ブッダになること

五つとは何と何か。第一はブラフマンの地位，第二はインドラの地位，第三は四方を守護する大王の地位，第四は全世界を統治する理想の皇帝の地位，第五はもはや後退することがないボーディサットヴァの地位である。」

このように，今までに女が就いた前例のない地位（sthāna）として，シャーリプトラが挙げるのは次の五つである。」

(A)　ブラフマン(brahman/梵天王)

(B)　インドラ(indra/帝釋)

(C)　四方を守る四人の大王(〔catur-〕mahārāja/四天王)[a)]

(D)　全世界を治める理想の皇帝(cakravartin/轉輪聖王)

(E)　もはや後退しないボーディサットヴァ(avaivartika-bodhisattva/不退轉菩薩)[b)]

a）鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』では「魔王」

b）鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』では「佛身」

この表の最後に「もはや後退することがないボーディサットヴァの地位」(avaivartibodhisattva-sthāna/不退轉位）が挙げられている。ボーディサットヴァ（bodhisattva/菩薩）とは，ブッダを目指して努力を続けている人のことである。「轉生」を繰り返しながら，ボーディサットヴァは段階を追ってブッダへの道を進む。もはや後退することがない境地に達すると，ブッダになるのがすでに確定済みとなる。この境地に達した女がいない事実を根拠に，「サーガラの娘が真理を会得したとは信じられない」とシャーリプトラは言うのである。

B

宇宙を創造したブラフマン（brahman/梵天）と天上で神々を統治するインドラ（indra/帝釋天）は，ヒンドゥー神話に登場する神（deva/天）であり，いずれも男である。神であるブラフマンとインドラは死ぬことがなく，今まで更迭が行われたことがない。宇宙の創造や神々の統治に今までに成功

した男は，それぞれ一人しかいないことになる。また，ヒンドゥーの神話では「四方を守る四人の大王」(catur-mahārājika/四天王）が知られていて，これはすべて男である。この四人も神であるから死ぬことがないので，入れ替えはありえない。このように，ヒンドゥーの伝承に従う限り，ブラフマンとインドラになったのも，それぞれ一人しかいないのであるから，「今までに女が就いた前例のない地位」としてわざわざ挙げるまでもない。

ところが，仏教では状況が全く異なる。生命体となろうと非生命体であろうと，仏教では不滅の物体が認められない。永遠に生存する存在が認められない以上，ヒンドゥーにとって「不死の存在」(amara）である神々も，いずれは身体が消滅することになる。仏教では神々も「轉生」するのである。そして，「善い行い」(śubha-karman/善業）の質と量が極限に近づけば，人間もインドラなどの神に生まれ変わることができる。

極端な「善い行い」をする人間がいると，インドラは地上に降りて来て，当人にしつこく動機を問いただすことがよくある。自分の地位が侵されはしないかと恐れているのである。極端な「善い行い」をする者は，極端な「楽しい報い」(sukha-phala/樂果）を狙っているに違いなく，それはひょっとすると「インドラの地位」かも知れないのである。

仏教で伝えられる説話によると，シャーキャ・ブッダは前世でインドラであったことがあるという。今はシャーキャ・ブッダの身体に収まっている「心」(vijñāna/識）も，かつてインドラの身体に収まっていたのである。そうすると，この「心」が去る直前に，インドラの身体は死んだはずである。

『菩薩本生鬘論』という説話集が中国語で伝わっているが，そこに採録されている説話の一つでは，死期の近づいたインドラ（帝釋天）が登場し，「神々の世界」に住む者に特有の死相（五衰）が顔に現れ，行く末を心配している。インドラも死すべき存在 (mṛtya) とされているのである。

是時　三十三天帝釋天王　五衰相貌　慮將退墮（『菩薩本生鬘論』2，「尸毘王救鴿命縁起」，『大正』，3，333.b.16-17）

是の時，三十三天帝釋天王，五衰の相貌にて，將に退墮せむことを

慮る。

一方ブラフマン（梵天）については，サルヴァスティヴァーディン派の理論を集成した『大毘婆娑論』に詳しい記述が見られ，その寿命が「一劫半」と規定されている。ブラフマンの生存限界が設定されているのである。

問　大梵天等壽量云何　答　大梵天壽量一劫半（『阿毘達磨大毘婆娑論』98，『大正』27，509.b.1-2）

問ふ。大梵天等の壽量，云何に。答ふ。大梵天の壽量，一劫半なり。

「カルパ」（kalpa/劫）は時間単位である。宇宙が発生してから消滅するまでの周期が１カルパであり，これは12億8000万年に相当する。1.5カルパ（一劫半）と言われるブラフマンの寿命は，19億2000万年ということになる。これは想像を絶する長寿であり，さすがは「もと創造主」であるが，とにかく寿命が有限であり，死ぬべき存在と認められているのである。

そうすると，19億2000万年ごとに，ブラフマンは交替することになろう。だからこそ，『サッダルマ・プンダリーカ』では，「ブラフマンの地位」（brahma-sthāna）という表現が用いられているのである。19億2000万年の寿命が尽きると，ブラフマンは死んで，その身体は滅びる。そして「心」はどこかへ行く。同時に別の「心」がどこかからやって来て，忽然として発生した新ブラフマンの身体に侵入する。こういう場合を想定してか，神々の身体は「忽然として現れる」（prādur-bhavati）と言われ，受精に始まる成長プロセスが認められていない。忽然として出現した新ブラフマンの身体にはいるのは，転生を繰り返してブラフマンになる準備に専念してきた「心」である。

C

さて，仏教で組み立てられた宇宙は，三つの区域（tri-dhātu/三界）から成る。「欲望のある区域」（kāma-dhātu/欲界），「欲望は消えたが，まだ物質のある区域」（rūpa-dhātu/色界），そして「物質もない区域」（ārūpya-dhātu/無色界）の三つである。ブッダになって消滅してしまわない限り，

人間の「心」はこの三つの区域を次々に移動している（saṃsāra/輪廻）。

「欲望のある区域」に棲息するのは，地獄に住む連中と人間や動物のほかに，欲望を備えた神々がいる。地上世界と地下世界に天上世界の下層部を加えたのが「欲望のある区域」である。その上にあるのが「欲望は消えたが，まだ物質のある区域」で，修行が相当に進んだ人の「心」が行く場所である。

「欲望のある区域」の天上部は6層に分かれ，欲望を備えた神々が住んでいる。その最下層が「四方を守る四人の大王」（catur-mahārājika/四天王）の住む国であり，スメール山（sumeru/須彌山）の中腹にある。中腹といっても，何しろ海抜115万キロの山の中腹であるから，少なくとも海抜60万キロはある。この神々は東西南北にそれぞれ担当区域を割り当てられて，合わせて四つの方角を守護する。

「欲望のある区域」の天上部ののうち，下から二番目に位置するのが「33の神々が住む世界」（trāyas-triṃśa/忉利天）であり，スメール山の山頂にある。ヒンドゥー神話に登場するインドラは，すべての神々を統治する天国の皇帝であるが，仏教に採り入れられると，「33の神々の世界」の王にされた。真理を守護する役割を課せられ，ブッダが真理を説く際にはしばしば同席している。

このように，仏教でインドラと「四方を守る四人の大王」に割り当てられていたのは「欲望のある区域」であるが，ブラフマンに割り当てられたのは，「欲望は消えたが，まだ物質がある区域」であった。仏教では宇宙の創造が認められないので，最高神として扱うわけにはいかなかったが，それでも元の身分を尊重してか，インドラより1ランク上のグループに入れられているのである。真理を説くようにブッダに勧め，話が始まるとインドラと並んで座り，静かに聞いている。インドラと同じように，真理を守護する役割を課せられているのである。

ブラフマンなどの神々も，仏教に採り入れられて落ちぶれたとはいうものの，それでもなかなか大したもので，その地位は「善いこと」をした「報い」（phala/果）としては最高水準にある。ちょっとやそっとの「善い行い」で

は，とうてい達せられるものではないのである。全世界を統治する理想の皇帝(cakravartin/轉輪聖王）も，ヒンドゥー神話で構想されたものであり，人間を支配する皇帝たちの上に立ち，人間の間では最高の存在である。これは神ではなく人間であるので，ヒンドゥーの立場に立つにせよ仏教の立場に立つにせよ，交替のあることには論議の余地がない。しかしながら神々の場合と違って，「全世界を治める理想の皇帝」の地位は，いつも誰かが就いているわけではない。この地位に就く者はめったに出現しない。交替があるといっても，容易なことでは「全世界を治める理想の皇帝」になれないのである。やはり，想像を絶するほど常軌を逸して「善い行い」を重ねなければならない。このように，ブラフマンから「全世界を治める理想の皇帝」までの四つは，ブッダに次いで最も到達が困難な「報い」であり，男であるからといって就き易い地位ではない。

そうすると，女がなった前例がないものとしてブラフマンやインドラなどを挙げたところで，女の能力の低さを証明することにはなるまい。女を低く見るつもりなら，想像の及ぶ極限に位置する存在を挙げるよりも，家長(gṛhapati）や村長（grāmaṇī）くらいを挙げた方がよかろう（「女は家長や村長にさえなれないのであるから，ブッダなどになれるはずがない」)。五項目から成るシャーリプトラのリストは，仏教における女性差別の傍証にはならない。

D

さて初期の仏教文献『マッジマ・ニカーヤ』(majjhimanikāya）の115章(bahudhātuka-sutta）では，賢い出家者なら当然知っていなければならない基本事項が教えられている。これは言わば仏教教団の約束事であり，その中に「ありえないこと」(aṭṭhāna）と「ありえること」(ṭhāna）がある。

そして，「ありえないこと」としては，まず次の７事項が挙げられている(*Majjhimamikāya*, ed. Trenckner, 3, 65-66)。

① 一つの世界にブッダが二人生まれること

② 一つの世界に理想の皇帝が二人生まれること

③ 女がブッダであること

④ 女が理想の皇帝であること

⑤ 女がインドラであること

⑥ 女がマーラ（魔羅／魔王）であること

⑦ 女がブラフマンであること

次に，これに対応する「ありえること」として，次の7項目が挙げられている（loc. cit.）。

① 一つの世界にブッダが一人生まれること

② 一つの世界に理想の皇帝が一人生まれること

③ 男がブッダであること

④ 男が理想の皇帝であること

⑤ 男がインドラであること

⑥ 男がマーラであること

⑦ 男がブラフマンであること

この約束事のリストが成立したのは，大乗経典が成立するより遥か前であり，その頃の仏教修行者はブッダを目指していたのではなく，アラハン(arahan/阿羅漢）を目指していた。「一つの世界にブッダは一人」というのが約束事であるから，シャーキャ・ブッダがいる限り，誰もブッダになれない。真理を会得してアラハンになると，ブッダこそなれないが，もう「轉生」することがないから，限りなく生まれ変わって遠い未来にブッダになることもない。

ここでは「女がブッダであること」が「ありえないこと」とされ，「男がブッダであること」が「ありえること」とされているのであるが，女にしても男にしても，ブッダになる希望者がいることを予想したものではなく，現実を前提にしたものにすぎない。その時代の仏教では，真理を会得して到達できる最高の境地がアラハンであった。そして，このことについては男女の区別がなく，数多くの女がアラハンになっている。男がなれるものには女も

なっているのであり，この点では何の差別も認められない。

このリストが作られた時代には，誰もブッダになるつもりがなかったのであるから，「ブッダは女でない」という事実を指摘したところで，女を差別したことにはならない。このリストを根拠にして，「仏教史の初期から女はブッダになるのを禁じられていた」と結論するのは無意味であろう。実はシャーヤ・ブッダ自身もかつては女であった。

E

シャーリプトラのリストは，項目一つ一つが古い時代にさかのぼるものであるにせよ，単に事実を指摘するために提示されているのではなく，ブッダになろうと強く望んでいる女の存在を前提とする。すなわち，これは「女が就きたがっているけれども就けない地位」のリストである。

そうすると，『マッジマ・ニカーヤ』115に挙げられているリストと『サッダルマ・プンダリーカ』11に見られるリストとの間には，大きなギャップがあるように見える。単なる約束事のリストが「女が就きたがっても就けない地位」のリストとして提示されるようになるには，その過程で何か大きな変質が起こったのであろうか。

この問題に関して注目すべきものとして，『ディヴィャ・アヴァダーナ』(divyāvadāna) の「ルーパーヴァティーの話」に見られる五項目のリストがある。この話にはブッダのなろうと強く望んでいる女が登場するからである。主婦ルーパーヴァティー (rūpāvatī) は，飢えた女に乳房を食料として与えた自分の志をインドラに疑われ，ブッダになること以外に何も望んでいないことを理解してもらおうとして苦労する。そこで，「他意はない」と主張するルーパーヴァティーは，五つの項目を列挙して，自分の求めるところではないと言う。

(A)　王国 (rājya)

(B)　財産 (bhoga)

(C)　天国 (svarga)

(D) インドラ〔の地位〕(śakra)

(E) 世界を支配する皇帝の領土 (cakravarti-viṣaya)

「全世界を支配する理想の皇帝」やインドラになる意図があるかどうかを確かめようとして，インドラはルーパーヴァティーに質問をしている。そして，ブッダになる意図しかないことを知って安心する。そのような地位が女にとって未来永劫に無縁であると思っているなら，このような質問は最初から出ないはずである。「全世界を支配する理想の皇帝」やインドラやブッダになる可能性が女にもあることを前提にして，このような質問をしているのである。「ルーパーヴァティーの話」で，問題のリストは「女が目指しても無駄な目標」を列挙するものではない。

このリストに挙げられているのは，普通なら誰もが求めてやまぬものであり，最も得難いものである。それを望まないと誓うことによって，飢えた女に乳房を与えたルーパーヴァティーは，自分の志が「ブッダになること」にしかないことを立証しようとする。

「善い行い」をするというだけなら，それがどれほど激烈なものであろうと，ブッダになろうという決心の証しとはならない。来世での栄達を求めて「善い行い」(śubha-karman/善業) をすることもあるのである。ブッダになろうとする決意を証明するためには，ブッダになることとは別の最高目標を拒絶しなければならない。ルーパーヴァティーが挙げたのは，ブッダになることとは無関係な最高目標であり，ブッダを目指す者にとっては拒絶対象である。なお，二番目に置かれた「財産」は，「王国」や「天国」と並ぶ選択肢とされている以上，超巨大財産であろう。

ここで質問者のインドラが気にしているのは，もっぱら自分の地位である。わざわざ地上世界に降りて来て，一介の主婦にしつこく動機を問いただしたのは，自分の地位が侵されはしないかと恐れているからである。ブッダを目指していることが確認され，インドラは立ち去る。それから想像を絶する長い時が流れ，あのルーパーヴァティーの身体にあった「心」は，いろんな人間や動物の身体を次々に移動した後で，ある王子の身体にはいった。これが

シャーキャ・ブッダである。

飢えた者に自分の乳房を食料として他人に与えるのは，極端な水準の「善い行い」であり，狙っているのは極端な水準の「楽しい報い」(sukha-phala/樂果）のはずである。ここで拒否すべきは地上や天上での絶大な権力でなければならず，ささやかな幸せではバランスを欠く。天上での絶大な権力を拒否するとすれば，それ以上の目標を目指していると判断せざるをえない。仏教の立場から見れば，それ以上の目標とはブッダになることである。「ルーパーヴァティーの話」に挙げられているのは，「女が目指しても無駄な目標」のリストではない。

F

『スカーヴァティー・ヴィューハ』(sukhāvatīvyūha/無量壽經）には，前世のアミターバ（amitābha/阿彌陀）がボーディサットヴァとして行った活動を列挙している個所がある。そのような「アミターバの活動」(bodhisattva-caryā/菩薩行）の一環として，前世のアミターバは，限りないほど多くの人々を地上と天上で最高の地位に就けているのである（*Sukhāvatīvyūha*, ed. Ashikaga, 25)。

(A)　ジャンブドゥヴィーパ（jambudvīpa/閻浮提）の支配者であること

(B)　全世界を治める理想の皇帝であること

(C)　四方を守る四人の大王であること

(D)　インドラであること

(E)　スヤーマ（suyāma）であること

(F)　サントゥシュタ（saṃtuṣita）であること

(G)　スニルミタ（sunirmita）であること

(H)　ヴァシャヴァルティン（vaśavartin）であること

(I)　神々の王であること

(J)　ブラフマンであること

(C) から (H) までの6項目は，下から上への順に，6層から成る天上の国の統治者を列挙したものである。(I) に挙げられる「神々の王」とはインドラのことであるから，下から2番目の天国の統治者 (D) として挙げられるのに加えて，ブラフマンと対を成す高位の神として再び挙げられたのであろうか。

ここに提示されるリストは，前世のアミターバが行った「ボーディサットヴァの活動」の水準の高さを誇示するものである。前世でボーディサットヴァであった時でさえ，人々をブラフマンに生まれ変わらせることくらい軽くできたのである。残るのは人々をブッダにすることだけである。

このように，ボーディサットヴァ時代にこれだけ大事業ができたのであるから，自分がブッダになった暁には，人々をブッダにするのはいとも簡単であろう。このリストから示唆されるように，『スカーヴァティー・ヴィューハ』を信奉する人々の間で，地上と天上で高位者になることは，ブッダになることに次いで，最高度の「楽しい報い」と認識されていたのである。ルーパーヴァティーの話の場合と同じように，ここに列挙されているのも想像しえる限り最も実現が困難な目標であり，人々が最も実現を望んでいる目標である。

G

大乗経典『カルナー・プンダリーカ』(karuṇāpuṇḍarīka/悲華經) では，計り知れないほどの寄付をしたアラネーミン王 (araṇemin) の意図について，主席祭官のサムドラレーヌ (samudrareṇu) が七つの可能性を挙げる (*Karuṇāpuṇḍarīkasūtra*, ed. Isshi Yamada, 2,65)。

(A) 神になること (devatva)

(B) インドラになること (śakratva)

(C) 〔真理の敵〕マーラになること (māratva)

(D) 百万長者になること (mahābhogatva)

(E) 独りで真理に達した者の方法 (pratyekabuddha-yāna)

(F)　小乗修行者の方法（śrāvaka-yāna）

(G)　究極真理〔の会得〕（samyak-sambodhi）

このリストに挙げられているのは，いずれも極端な「善い行い」に対応すべき極端な「楽しい報い」である。ルーパーヴァティーの場合のように自分の身体の一部を切り取って提供するのが極端な「善い行い」であるのは言うまでもない。アラネーミン王の場合は財産の寄付ではあるが，その量と質において，やはり極端であることに違いない。

第一項目と第二項目と第四項目は基本的にルーパーヴァティーの挙げるのと同じであり，真理会得とは無関係な最高目標である。普通なら誰もが求めてやまず，最も得難いものである。まずはこれを否定しないと，ブッダになりたいという志を疑われてもしかたがない。第三項目は仏教の立場を明確にするためのアンティテーゼであり，真理を妨害するものが挙げられている。第五項目と第六項目は，大乗仏教の立場を明確にするためのアンティテーゼである。「独りで真理に達した者」（pratyeka-buddha/獨覺）とは，誰にも指導されずに独自で真理に到達した者で，自分の得た成果を人々に説くことがない。大乗運動の推進者たちは，このように世のため人のために頑張ろうとしない者を否定する。

そうすると，大乗仏教の立場から見れば，第一項目から第六項目までが無視すべきものであり，最後の第七項目こそ目指すべき究極目標である。第一項目から第六項目までを拒むなら，残る選択肢は第七項目だけになり，大乗仏教の究極目標に絞り込まれ，ブッダになろうとする決心の強さが証明されるのである。

真理会得とは無関係な究極目標を列挙して，これに大乗仏教のアンティテーゼを加えれば，大乗仏教の立場から見て拒否すべき項目のリストが出来上がる。そして，これに仏教帰依者の究極目標（ブッダになること）を加えれば，極端な「善い行い」の実践者の真意をテストするための選択肢リストが完成する。

H

ここのように，大乗経典に挙げられていたのは，もともとテスト用の選択肢リストであった。この種のリストに挙げられる項目は，極端な「善い行い」の「報い」である。極端な「善い行い」をする者がいるとすれば，その「報い」としてもたらされるのは，このような究極目標である。

このようなリストを使ってテストが行われる場合，対象が女に限られるわけではない。リストに挙げられているのは実現が最も困難な目標である以上，果てしないほど反復される「轉生」が前提とされており，今の身体が男であるか女であるかは問題ではないのである。リストを掲げてシャーリプトラが判断しようとしているのは，「遥か遠い未来に女がブッダになるかどうか」ということではなく，「女の身体をとったままブッダになれるかどうか」ということである。

シャーリプトラの指摘するように，女の身体をとって究極目標を実現した前例はないのである。五項目を挙げたシャーリプトラは，「真理を会得するつもりのない者であっても，真理を会得しようとする者であっても，女の身体をとったままで究極目標に達した前例はない」と言いたいのである。

女が就いた前例のないことを根拠に，サーガラの娘がブッダになったことにシャーリプトラは異議を唱える。一方，このような地位に女が就く可能性を前提として，インドラはルーパーヴァティーに質問をしている。しかしながら，シャーリプトラの異議申し立てとインドラの尋問は，女の可能性について異なる伝承を受けたものではない。二つの発言に矛盾があるわけではないのである。仏教の伝承では，今たまたま女の身体をとっていても，努力を続けていれば，遥か未来にインドラにもなれるしブッダにもなれる。ただし，その時は男の身体をとっていなければならない。シャーリプトラが列挙しているのは「女の身体をとっていては就くことができない地位」であり，「女が目指しても無駄な目標」ではない。シャーリプトラは「一度でも女の身体をとると，未来永劫に究極目標に達することはできない」などと言っている

のではないのである。

仏教では身体についてのみ男女が区別され，身体に宿る「心」には性別がない。女の身体に宿っている心も，「轉生」を繰り返しているうちに男の身体に移ることができるのであり，今の身体がたまたま女であるということについて，ブッダを目指すルーパーヴァティーは何の不安も抱いていない。質問をしているインドラの方も，未来での可能性まで否定しているわけではない。否定するどころか，女のルーパーヴァティーが実際にインドラの地位につくことこそ，インドラが最も恐れていることである。今は女の身体をとっているので，ルーパーヴァティーがインドラの地位につく心配はないが，この状態が続くのはせいぜい後数十年に過ぎない。今のルーパーヴァティーが死んだ後のことをインドラは心配しているのである。

ところが，『サッダルマ・プンダリーカ』に登場するサーガラの娘は，「いつか私はブッダになる」と言ったのならともかく，見たところまだ女の姿をしているのに，「私はすでにブッダになった」と言ったのである。「轉生」を繰り返す過程で性別が変わるにしても，ブッダになる時には男の身体をとっていなければならない。途方もなく長い準備活動の後でラストスパートをかけるには，身体に欠陥があってはならないのである。月経や妊娠や出産を伴う女の身体は，身障者や病弱者の身体と同じように，最終段階に相応しくないと考えられている。

今たまたま女の身体をとっている者が未来永劫にブッダになれないわけではないにしても，ブッダになれるのは男の身体に心が移った上でのことである。仏教世界の常識では，このプロセスを踏むには限りないほど「轉生」を繰り返さなければならない。ところがサーガラの娘は，「『サッダルマ・プンダリーカ』を教わると直ちに究極の真理に達した」と言っているのである。もしそうであるとすれば，「轉生」する間もなくブッダになったということになる。この常軌を逸した超高速度は，シャーリプトラの想像を絶するものであった。

サーガラの娘が仏教帰依者なら，究極目標はブッダになることであろうが，

女の身体のままでブッダになった者が今までいないので，この娘が真理を会得したと言われても，シャーリプトラはにわかに信じられない。しかしながら，仏教の伝承で男とは「男の性器を備えた者」(manuṣyendriya-samanvāgata) のことであり，疑念を表明した段階ではまだシャーリプトラの知らなかったことであるが，娘はすでに男になっていたのである。女の性器が消えて男の性器が現れたのを目にし，ブッダになって真理を説いている姿を見て，シャーリプトラはやっと納得する。こうして，想像力の乏しい教条主義者も，『サッダルマ・プンダリーカ』の真意に触れ，マハーヤーナ (mahāyāna/大乗) の道をとる機会が与えられたのである。

シャーキャ・ブッダについて，今まで隠されていた真実がある。『サッダルマ・プンダリーカ』は，これを初めて明らかにしようとするものである。今まで隠されていた真実が明らかにされているのであるから，今までブッダの言葉を唯一の頼りとしてきた人々にとって，大きな衝撃であるのは当然である。ブッダの今までの言葉は真理を伝えようとしたものに違いないが，すべての人々をブッダの水準に導くための「手段」(upāya/方便) にすぎず，真理は言葉で完全に表しきれるものではない。このように「手段」にすぎないブッダの言葉に固執する人々に衝撃を与えることこそ，『サッダルマ・プンダリーカ』の意図するところであった。確かに，ブッダになるには無限に近い時間を要するのが常識である。サーガラの娘が登場するエピソードでは，『サッダルマ・プンダリーカ』の真意を伝えるために，この常識を破る奇跡が提示されたのである。

I

ブラフマンもインドラもブッダも常に男性名詞で表記され，初期経典でも大乗経典でも常に男である。『マッジマ・ニカーヤ』のリストは，この事実を指摘したものである。後代になって，このリストは二つの場面で利用された。まず『ディヴィヤ・アヴァダーナ』で，このリストが「最も実現が困難で最も望まれる目標の一覧表」として，極端な「善い行い」に耽る者をテス

トするのに用いられ，これが大乗経典に継承された。次に『サッダルマ・プンダリーカ』で，サーガラの娘がブッダになるという話を聞いて驚愕したシャーリプトラは，問題のリストを「女の身体のままでは就けない地位の一覧表」として用い，このとんでもない話を退けようとした。

正　誤　表

小林信彦「インド文化と日本文化」
（『国際文化論集』20号，1999）

	誤	正
7頁13行	3×10^{52}年	3×10^{51}カルパ（38.4×10^{59}年）

Śāriputra's List of Positions Closed to Women

Nobuhiko KOBAYASHI

In the *Saddharmapuṇḍarīka*, when the daughter of Sāgara declares that she has become a *buddha*, Śāriputra raises an objection saying that no woman has ever occupied the positions as Indra, Brahman, universal monarch, four guardians of the quarters and *buddha*. However, he does not mean that women are hopeless forever.

In Buddhist tradition, such positions are considered to be unattainable as long as one lives in a feminine body. This impossibility is neccesarily removed, if her mind transfers to a masculine body in the coure of transmigration. Abnormality in the case of Sāgara's daughter is in speed: She becomes a *buddha* so rapidly that she has no time for transmigration. Therefore the change of sex is inevitable: Her feminine organ disappears and a masculine organ appears. Having seen this, Śāriputra is reluctantly convinced.